Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-26

<書評>ブラック・ジャコバン : トゥサン=ルヴェルチュールとハイチ革命/C・L・R・ジェームズ

小笠原, 博毅

(Citation)
「多元主義」を理解する30冊 : 多様化する世界を読み解き、生き抜くために

(Issue Date)
2017-09-28

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(Rights)
©BAコンソーシアム 2017

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004815

『ブラック・ジャコバン――トゥサン=ルヴェルチュールとハイチ革命』

C・L・R・ジェームズ

C.L.R.JAMES:THE BLACK JACOBINS
Toussaint l'Ouverture
and the San Domingo revolution
ブラック・ジャコバン
トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命
C・L・R・ジェームズ著
青木芳夫監訳
増補新版
大村書店

評者：小笠原 博毅

「多元主義」、なんとも不思議な言葉である。世界は、そもそも「多元」なのだから。物質的貪欲さがキリスト教と「文明化の使命」を味方につけて炊きつけた西欧の植民地主義が、それを「単」元主義にしてしまっただけなのだから。19世紀初頭、「世界史」という視点で地球上の人間の営みを理解可能なものにする努力が行われ始めた頃から、世界はいつのまにか進歩、拡張、展開といった、どこかに始原を定めそこを起点（ルビ：オリジナル）に何かが伝播・波及（ルビ：コピー）させられていくという発想で語られることに慣れてしまった。そして「多元主義」ではない「どこか」から眺めて、そこにはない「何か」をわざわざそう名付けることになってしまったのだ。

1901年英領トリニダードに生まれたマルクス主義思想家、政治活動家、作家、戯曲家でありかつクリケット批評家であったシリル・ライオネル・ロバート・ジェームズにとって、この「どこか」は西欧やフランスのことである。一方、「何か」こそ1791年の仏領サンドマングでアフリカ系奴隷によって起こされた叛乱であり、その叛乱を指揮した解放奴隷のトゥサンであり、その結果1804年に独立を達成したハイチ共和国であった。この出来事を、西欧市民革命やそれらを通じて今に至る近代性を原書とする翻訳だと考えてはいけない。そうではなく、大西洋の植民地世界でアメリカ合衆国に次いで二番目に独立を果たした共和国であるハイチのあり方そのものが近代であり、その過程を生きたアフリカ系奴隷こそが近代人なのである。これが、一人の稀有な叛乱のリーダーを主人公にした本書を世に問うことでジェームズが言いたかったことである。ハイチ革命を「見えない革命」、「封じ込められた革命」にしてしまったのは、長い間ハイチを独立国家として認めなかった西欧列強諸国の、近代性のみを普遍だと見なす歴史観のせいなのである。

砂糖きびの収穫、製糖所への運搬、できあがった砂糖の輸出作業、すべてがその当時世界のプロレタリアートの中で最も緊密な集団生活をしていたアフリカ人奴隷の労働に依存していた。ハイチから輸出される砂糖と入れ替わりに輸入されたのは、奴隷たちの衣服や食料（塩干鱈とブレッドフルーツ）、そして奴隷たち自身だった。ジェームズは言う。「したがって黒人奴隷（ニグロ）は、当初から、本質的に近代的な生活を送ることになったのである」（384頁）。1789年の仏革命の影響を受けて起きた客体としてではなく、18世紀終盤の啓蒙と理性の時代における連動性と同時性の文脈に、言わば主体としてハイチ独立を配置しなければならない、とジェームズは言う。彼の史眼は、第三世界主義や周縁理論を先取っていたというだけではない。もし西欧近代思想の輪郭を描くきっかけがハイチ革命にあったとしたら、『ブラック・ジャコバン』はただの予言の書である以上の意味をもつだろう。

ユダヤ系アメリカ人の批評家スーザン・バック=モースは、著書『ヘーゲル、ハイチ、普遍史』（2009年、未邦訳）において端的にそのことを指摘している。近代弁証法哲学のパイオニアであるフリードリヒ・ヘーゲルが『精神現象学』の中で展開した有名なテーゼの一つに、「主人と奴隷の弁証法」がある。近代的個人の自立性は他者による承認を得て初めて可能になるが、その自立の主を奴隷による労働があって初めて命を保てる主人になぞらえた比喩である。自立性こそ他者への依存であるという逆説。この逆説は、トゥサンに率いられたハイチでの叛乱のニュースをきっかけに構想されたという。ヘーゲルは、当時ドイツで発行されていた時事誌『ミネルヴァ』やイギリスの新聞『エディンバラ・レヴュー』、『モーニング・クロニクル』などの定期購読者で、それらメディアが提供する情報からハイチで起きていることをいち早く耳にしていた。　そして他の多くの知識人同様、

驚いた。驚いたが理解しながら構想した「普遍史」の青写真は、仏革命のような白人の男性市民の自立性を前提にしたものではなく、その自立を可能にした、アフリカから引き剥がされた黒人奴隷たちの存在が自由を獲得する過程こそが陰画となっている。黒人奴隷こそが普遍的人間なのだ。ヘーゲルの思想は西欧に内在的な条件で練り上げられたものではなかった。植民地主義というまさに時代の潮流のただ中で生まれたのである。

　むろんジェームズはバック=モースほどのラディカルな読み方を提供しているわけではない。しかしトゥサンの思想と思考を丹念に追いながらジェームズは、もはや仏革命が原書でハイチが翻訳なのか、もしくはその逆なのかという因果論で考えること自体が不可能なほど、近代はそこかしこに同時多発的に芽吹いている、という意味での普遍主義の立場を鮮明にしていく。トゥサンは、勤勉、社会道徳、公共教育、宗教的寛容、自由貿易、公民としての自覚、人種的平等を軸に脱植民地化の施策を進め、彼の指揮する人民軍は、自分たちのシンボルとして仏国旗（三色旗）を掲げていたのだから 。

　ジェームズは本書をロンドンで出版する4年前に、トゥサンを主人公とする戯曲を書いている。それはロンドンのウェスト・エンドにおいて、黒人が書いた脚本を黒人俳優が主役として演じる史上初の舞台だった。叛乱の指導者となりながら、ハイチに奴隷制を復活させないためにナポレオン体制との妥協を選び、のちに皇帝となる腹心ジャン=ジャック・デサリーヌの離反に遭い、やがて彼のカリスマ性を何よりも恐れたナポレオン・ボナパルトの計略によって捕縛され幽閉ののち、ハイチ独立の前年に病死するその人生は、まるで仏革命後のさまざまな権力ブロック間の抗争のように、帝国主義段階へと進む英米を含む多様な勢力との折衝と妥協の連続だった。それは英雄的な革命闘

士というよりも、現実的な交渉を重視し利害調整を図る政治家のそれである。この舞台を観たなかにウィンストン・チャーチルの姿があったことは、余り知られていない。

『ブラック・ジャコバン』出版の1938年当時、ジェームズは国際共産主義運動の中で執筆と講演を重ねていたが、レオン・トロツキーからの直接的影響を『ブラック・ジャコバン』におけるトゥサンのキャラクターに見ることができる。それはトロツキーの『ロシア革命史』において、レーニンの登場によって「集合的な歴史のドラマ」が始まったという、必ずしも英雄史観ではないが、卓越した個人を状況に埋もれさせない語り口に認められるものだ。ジェームズは言う。「革命が彼（トゥサン）を作り上げた」（247頁）と。しかしすぐさま次のように続ける。

「トゥサンの強烈な個性によって、混沌のなかからさまざまな潜在能力が形を与えられ、互いに結合され始めた。それ以降については、どこからどこまでが社会諸力によるもので、どこからどこまでがトゥサンの個性によるものか、こたえることはできない（同頁）。」

仏革命とハイチ革命との関係同様、トゥサンの個人的力量とハイチ社会の環境との関係は、どちらかがどちらかの原因であり結果でありという単線的な因果論では理解できない。原因も結果も常に複数、お互いがお互いに常に開かれている。

「現実には、利潤のための生産システムの本質そのものによって、帝国主義はアフリカ大陸の真の富―アフリカ人民の創造能力―を圧殺し続けている」（378頁）とジェームズが記すとき、ハイチで叛乱に成功した黒人たちと、いまだ叛乱に至っていない、「アフリカ大陸と

いう広大な牢獄につながれた（下層民）パーリア」（368頁）としてのアフリカ人たちが同じ舞台に置かれている。そこに素朴な国際連帯主義があることは否定できないだろう。ただそれは、資本制の発展段階において同じ道程を歩むはずの国際プロレタリア的連帯を想定してはいない。ハイチ革命が仏革命そのものと〈同じ〉だったように、仏領サンドマングの黒人たちはアフリカにおける奴隷予備軍そのものたちと〈同じ〉なのだ。マルクス主義者であるジェームズにとって「人種問題は政治においては階級問題ほど重要ではない」（280頁）が、「人種的要因を偶然紛れ込んだ要因のように軽視するならば，基本的原因と見なすことに劣らず重大なあやまりを犯すことになる」（同頁）。

人民軍によって解放された仏領サンドマングに建てられた「共和国ホテル」のダイニングでは、「黒人も、現地の白人も、そして米国人たちも、同じ資格でホテルを訪れた。民間人も、将軍や将校も、そして高官たちも同じテーブルについた」（247頁）という。トゥサンも特別優遇されるわけではなく、空席に案内されて他のゲストと同じように食事をした。その生涯で30冊に及ぶ著作を記し、大小の数知れぬ講演を行い、多種多様なラディカル政治集団を渡り歩きながら、トリニダード、ランカシャーの地方都市ネルソン、ロンドン、アメリカ、再びトリニダードに戻り、そして終の棲家となった南ロンドンのブリクストンに至る流浪の人生。旅に生き、旅に死んだジェームズが描き出したかった革命の風景が、そこにはある。